

旧約聖書におけるイスラエル 12 部族の 歴史的変遷と陰影（後編）¹⁾

宮 寄 薫

第5章 ベニヤミンについて²⁾

この章で論じるベニヤミンは、第4章で論じた消失させられた部族ダンとは対照的に、歴史の変化の中で、変貌しつつも上昇する部族としてイスラエル 12 部族の中核をなしていったと考えられる。ベニヤミンに関する旧約聖書諸文書を通して、様々な角度からこの主要部族の分析を試みる。

1 ベニヤミン族の特性

ベニヤミンは、イスラエル 12 部族の中において特殊で、かつ最も重要な部族の一つである。創世記ではベニヤミンをもってヤコブの 12 人の息子が揃う。しかしながら、旧約聖書全体においては、ベニヤミンは中心的存在というよりは、文字通り北と南との間の中間的な立ち位置に押しとどめられている感が否

1) 本稿は、2023 年 6 月に学位（乙）請求論文として東京神学大学に提出した同タイトルの論文の後半部分（第 5-7 章および結論）をまとめたものである。論文は、同年 9 月の東京神学大学論文審査委員会（主査：小友聰先生、副査：左近豊先生、田中光先生）および 12 月の東京神学大学学院神学研究科委員会による論文審査を経て合格が承認された。本稿は、誌面の都合上、同論文全体を大幅に縮小、または要約した形での掲載であることをお断りしておく。各章の内容において、すでに掲載された学術論文と重複するものについては脚注に示したのでご参照いただければ幸いである。なお、論文の前半部分は『伝道と神学』No.14（2024 年 3 月）に掲載されている。

2) ベニヤミンについては、拙論「旧約聖書に隠された部族間の相剋——ベニヤミン問題をめぐる考察」（『伝道と神学』No.5、2015 年）および「歴代誌におけるベニヤミン族の位置付け」（『伝道と神学』No.11、2021 年）も参照されたい。

めない。まずは旧約聖書におけるベニヤミンにまつわる特徴を分析し、ベニヤミンがどのように扱われているかを探り、その理由についても考察していく。

1) 起源 地理的特性

イスラエル 12 部族の中でのベニヤミンの位置付けには、地理的な特性が大きく影響している。ベニヤミンの部族領はイスラエルのほぼ中央に位置し、北側はエフライム、南側はユダの境界線に挟まれた中心部にあることが、この部族の特殊な運命を決定づけた大きな要因と言える。

ベニヤミンの歴史的起源は不明な点が多いが、旧約聖書に記される部族の名前と領土、諸部族との関係からある程度の推測がなされうる。

Schunck は、ベニヤミン *בָנֵי יְמִינָה* の名の意味は「右手側の息子」「南の息子」であるとし、右手あるいは南側にいる別の地理的／民族的存在との関連において地理的視点から表した名称であるとし、「最もありそうなのは、ベニヤミン部族とともにその北に位置する強力な部族エフライムとの密接な関係を示しているのではないか」と述べる³⁾。

ドゥ・ヴォー (R. de Vaux) は、「ベニヤミン部族は、共に入った他のグループ（エフライム）の南にとどまった。エフライムは彼らが定着した地の名前を取ったのであり、このことはベニヤミンの部族が定着後に部族として形成されたことを前提とする」と説明する⁴⁾。

Schunck はベニヤミンとエフライムの氏族間に軍事的連合としての緊密な関係があったと推測し、カナン定着後、ベニヤミンとエフライムの領地は分割されたが、その境界線付近の、古い祭儀場のあったギルガルにヨシュア（エフライム人）が最初のヤハウェの聖所を建てた（ヨシュ 4-5）ことが、両者の関

3) Klaus-Dietrich Schunck, *Benjamin: Untersuchungen zur Entstehung und Geschichte eines Israelitischen Stammes*, Alfred Töpelmann, 1963, pp.4-5. -ABD vol.1, trans. Phillip R. Callaway, p.671.

4) R. ドゥ・ヴォー著、西村俊昭訳『イスラエル古代史——起源からカナン定着まで』日本基督教団出版局、1977年、872-3頁。ドゥ・ヴォーは、ヨシュア記 1-9 章の物語はベニヤミン伝承に帰せられているとする。

係を立証すると述べる⁵⁾。

デボラの歌（士 5:14）もエフライムとベニヤミンの近しさを示していると言えよう。

ベニヤミンは、部族集団も領土もエフライムに比べて小規模ではあったが、小規模でも攻撃的で軍事的に強力な集団であったことが推測される。

2) 創世記に描かれるベニヤミン

前述したようなベニヤミンとエフライムとの間に元来密接な関係があった痕跡は、創世記のヤコブの子らの誕生物語に見られる。ヨセフとベニヤミンは同じ母を持つ兄弟として描かれた。ヨセフの名はもう一人の男子を得ることを願って付けられた（創 30:24）。ベニヤミンの誕生と引き換えに母ラケルは死ぬが、それを境に物語の主役はヤコブから、ベニヤミンを加えたヤコブ（イスラエル）の 12 人の子らへと移ってゆく。この流れにおいても、12 人（部族）から成るイスラエル共同体にベニヤミンが存在することの必要性が表現されている。

創世記においてベニヤミンは、被保護役的立場に置かれ、父ヤコブからも兄ヨセフからも特別な扱いを受けている（創 43:34）。だが、ベニヤミンは創世記を通して終始無言であり、特に「ヨセフ物語」において非常に抑制されて描かれている。おそらくこれは、ヨセフ物語において水面下で進行しているテーマが、ベニヤミンの保護的役割がヨセフからユダへと移ることであるため（第 6 章を参照）、ベニヤミンは中立的で受け身の状態に描かれているのだろう。

歴史的変遷の中で、ベニヤミンは元来ヨセフの家（エフライム／北王国）と関係が深かったが、のちにユダ（南王国）に組み込まれ、協力させられる形で存在していった⁶⁾。ヨセフ物語におけるベニヤミンの弱さやあいまいさの表現

5) Schunck, op.cit., p.671. Schunck は、これら（エフライムとベニヤミン）の氏族は前 12 世紀少し前にヨルダン川の東から来てエリコに進み、ルズーベテルとエルサレムの間の小さな土地に入ったと見る。

6) ただし、これはサウルの死後、イスラエルとユダが争う中で武将アブネルが個人的に

は、そのような揺れ動きの事実はベニヤミンの身勝手な決断によるのではなく、部族間の複雑な歴史的変動によるものであることを、特にその当時の対象読者（ベニヤミン、イスラエル、およびユダの人々）に向けて示したい意向があったからではないだろうか⁷⁾。

ヨセフ物語の核は北王国にあったとしても、これをまとめ上げたのは、おそらく北王国崩壊前後に、南のベニヤミン領かユダ領に避難し移動してきたレビ人あたりであろうと筆者は推測する。

3) イスラエルの中のベニヤミン

創世記を除くと、五書では、ベニヤミンについての記述は中立的である。ベニヤミンに属する個人または集団が特筆されるのは、主として士師記、サムエル記である。なかでも最も特筆すべきは、士師記の枠に収まらない士師記19-21章である。

士師記19-21章の解釈には様々な議論があるが、ベニヤミン部族がネガティブに書かれているとの見方は一致している。Giffoneは、「士師記19-21章の中でどの個人どの部族がポジティブに描かれているか見極めるのは難しいが、ユ

ダビデに付いたのが発端であり（サム下2:8-3:30）、当時のベニヤミン族でサウル王家に着く者の中には反発もあった（サム下5:5-8）。その後の歴史では、北王国の滅亡前後に、逃ってきた北の諸部族を南のベニヤミンやユダの地で多く受け入れた経緯があったことが想定される。レヴィンは、「今日の『士師記』から『列王記』までの諸書の背後には、いくつもの集成や連作が存在している。それらの物語の大多数は、北王国起源のものである。前722年にアッシャーがサマリアを征服した際に、それらのテクストは、逃げ延びた宮廷人によってユダにもたらされたにちがいない。そうでなければ、それらの物語がそもそも保存され、前6世紀以降になってから、成立しつつあった旧約聖書に取り入れられたわけが説明できない」と述べている。-C. レヴィン著、山我哲雄訳『旧約聖書——歴史・文学・宗教』教文館、2004年、53頁。

7) もしそれが正しいなら、ヨセフ物語の最終形態の成立は、どんなに早くとも北王国滅亡前には考えられない。ヨセフ物語の大部分の著者はJ（ヤハウイスト）またはE（エロヒスト）とされるが、ヨセフ物語は北方部族の祖であるヨセフの人生に焦点を当てると同時に、イスラエル全体を統べる力と責任を帶びてゆく主体がユダに委ねられていく様子も埋め込まれている（第6章を参照）。

ダがイスラエルのリーダーとして示されている」と述べる⁸⁾。彼は、前後に置かれた「イスラエルには王がいなかった」（士 19:1, 21:25）との言明は、正しい王がいないため、イスラエルはソドムより酷い状態で、同族の一つの部族に対する殲滅戦争を遂行し、一民族の根絶とレイプ事件に対処するためにさらなるレイプと計画された民族の根絶の連鎖が生じるほどだった、というメッセージである、と捉える⁹⁾。

このような「王の不在」の枠内で書かれるのが、士師記 19–21 章である。先行する士師記 17–18 章にも同じく「そのころ、イスラエルには王がいなかった」（士 17:6, 18:1）との枠があるが（士師記 17–18 章については第 4 章で触れた）、二つの話は別々のものと考えられる¹⁰⁾。

にもかかわらず士師記 17–18 章と 19–21 章は共に「王がいなかった」（士 17:6, 18:1, 19:1, 21:25）状況を伝え、「そして、おののが自分の目に正しいと思うことを行っていた」（士 17:6, 21:25）という言葉で締めくくるのである。この作られた枠組みは、構造上次の二つの役割を果たしていると考えられる。すなわち、i) 士師記と後続するサムエル記をつないで、士師が裁く時代から王が国民を治める時代への移行を導く。ii) 士師記 19–21 章と士師記 17–18 章との連続性を持たせ、二つの話を士師記の補遺として同列に置く¹¹⁾。

しかしながら、士師記 19–21 章に記されるベニヤミン族の悪行、その結果もたらされたイスラエルの内戦と和解的解決といった内容と、全体の枠として掲げられている「イスラエルに王がない」状況とがどう結びつくのかという点

8) Benjamin D. Giffone, “*Sit at My Right Hand*: The Chronicler’s Portrait of the Tribe of Benjamin in the Social Context of Yehud, T&T clark, 2016, pp.143.

9) ibid.

10) 第 4 章を参照。士師記 17–18 章と 19–21 章は、構造および表現上似ている点はあるが、本来はまったく異なる物語が同列に置かれたものである。

11) この ii) に関しては、Krisel が主張しており、「王の不在」および、主人公の「レビ人」の設定は、士師記 17–18 章に士師記 19–21 章を同様に補遺として位置付けようとする最終的な編集者の手によると説明している。-William Krisel, *Judges 19–21 and the “Othering” of Benjamin: A Golah Polemic against the Autochthonous Inhabitants of the Land?*, Brill, Oudtestamentische Studiën v. 81, 2022, pp.238–43.

の議論は未解決のままである。

同様に、士師記 19-21 章の書かれた時期についても議論がある。

Blenkinsopp は、他の聖書記事の並行箇所と、この話にベテルとミツバが目立つことに基づくと、バビロニア時代またはペルシア時代初期が最もふさわしいとみる¹²⁾。

士師記 19-21 章の内容からみても、これが士師時代と王国時代の間に起きた史実を伝えたものである可能性はほぼない。もしそうならサムエル記などの記述内容との間に重大な矛盾が生じてしまう¹³⁾。レヴィンが述べたように（注6 参照）、士師記 19-21 章は北イスラエル王国の古い伝承に基づく資料がのちにユダでまとめられた可能性、時期としては Blenkinsopp の指摘するように捕囚後に成立した可能性が高いということは言えよう。

しかし、ベニヤミン族についてかなりネガティブな士師記 19-21 章がなぜ収録されているのか。この問題を考察する前の手がかりとして、ベニヤミン族出身の王サウルについて論じていきたい。

2 ベニヤミン族の王サウル

1) サウルの王位とその評価

サムエル記上 9-31 章に描かれるサウルは、罪を犯して主に捨てられた悲劇の王、ダビデの引き立て役、などとネガティブに評価される傾向がある。こう

12) Joseph Blenkinsopp, "Benjamin Traditions Read in the Early Persian Period," in Lipschits and Oeming, eds., *Judah and the Judeans in the Persian Period*, Winona Lake: Eisenbrauns, 2006, pp.642-3. 捕囚期に荒廃したエルサレムに代わって、ほとんどダメージを受けなかったベニヤミン領のベテルとミツバが、宗教的・政治的中心地となっていたことはほぼ一致した見解となっている。

13) 例えば、士師記 19-21 章によれば、ベニヤミン族は殲滅寸前にまで追い込まれ、そのうち女性は全滅したので、その後のベニヤミンの子孫の母方は、ヤベシュ・ギルアドの処女かシロの娘に限定されるが、そのような痕跡は旧約聖書の中に見出されない。また、ヤベシュ・ギルアドの住民は処女 400 人を除いて全滅したのが事実なら、後のサムエル記（サム上 11:1-10, 31:11-13, サム下 2:4b-7, 21:12-14）にあるように、ヤベシュ・ギルアドの住民が登場しサウルとの関係が伝えられるはずもないである。

したアンチ・サウルの傾向は、ダビデに対して好意的なプロ・ダビデの傾向とセットで論じられることが多い。しかし最近のサムエル記研究において、サウルを再評価する研究や、サムエル記の著者はサウル、ダビデに対してバランスを取っているとの見方も出てきている。

サムエル記上 9-15 章において、サウル王が即位し戦果を上げたことは、複雑な記述ながら史実に基づくものであろう。しかしサウルは、主への献げ物と聖戦に関する決定的な過ち（サム上 13:8-14, 15:8-23）のゆえに退けられ、ダビデと入れ替わるように下降していった。

しかし細部をみると、サウル王の場合は明らかに、ユダの王たちに対する主の寛容さとは対照的な厳しさがある¹⁴⁾。主の期待を裏切ったサウルはただちに王として無効化され、それはサムエル記上 15 章で決定的となる。そして 16 章以降に登場するダビデが新たに見出される流れとなる。

こうした章の配置のしかたからも読み取れるのは、“ダビデはサウルを出し抜いて王位を奪ったのではない”，“サウルは自らの不信仰のゆえに自滅したのだ”という点の強調である。

そのように早い段階で廃位が決定的となるサウルの王位はどのように与えられたのか。

サウルの即位の記述は 3 通りある。

- i) ラマで、サムエルが密かに油を注ぐ（サム上 9:1-10:16） ii) ミツバで、サムエルの立会いのもと、くじによって選び出される（同 10:17-27）
- iii) 対アンモン人戦の勝利後、ギルガルで民全体によって選ばれる（同 11:14-15）

どの伝承が最も古く、どの部分が歴史的かについては議論がある¹⁵⁾。

14) 例えば、ダビデの倫理的過失に対して（サム下 11-12:25）、ソロモンの背信について（王上 11:1-13）、主が即座に王位剥奪を言い渡すことなどはなかった。

15) 例えば、ヘルツベルグは、このような伝承が複数の異なる形で伝えられている理由は、「単純にサウルが王になった次第について、個々の聖所でそれぞれ異なる固定した伝承が伝えられていた、ということなのである」とする。-H・W・ヘルツベルク著、山我哲雄訳『ATD 旧約聖書註解 6 サムエル記上 1 章一下 1 章』ATD・NTD 聖書註解刊行会、1996

Brooks は、イスラエルはサウル以前にも王制を試みたことがあったと指摘する。士師記のギデオン、その息子アビメレク（マナセ族、士 8-9）、エフタ（ギルアド人、士 11）がそうであり、その後も「40 年間イスラエルを治めた」（サム上 4:18）シロの祭司エリがその例であるとする¹⁶⁾。

たしかに、エリはおそらくイスラエルの政治的・宗教的な指導者であったと考えられるが、祭司になったエリの二人の息子たちは滅んでしまい（サム上 4:11-17）、エリの家を継ぐことができない。同様のことはサムエルの二人の息子たち（サム上 8:1-2）の上にも起こる（同 5 節）。第 3 章で述べたように、エリもサムエルもイスラエル全体の指導者として一代限りであった。ギデオンも王になってほしいとする民の要求に応えなかった（士 8）経緯がある。

そのような前段階を経てのサウル王の誕生に関して、他部族からの反応はどうだったのだろうか。特に、エフライムからのやっかみや反発はなかったのだろうか。

その観点において、エフライム人でもあるサムエル（第 3 章で詳述）の言動も微妙である。

サウルの即位の i) において、サムエルは、当初からイスラエルの王制に否定的であった（サム上 8:6）が、自分の意には反するものの、主に従ってサウルに油を注いでいる。サムエル自身が、王制（＝サウル）に対する否定と肯定の間でバランスを取らされているのである。サウルを王とすることに深く関与したサムエル自身のアンビバレンツな姿勢が初めから明かされていることは注視すべきである。

実際に、サウルのカリスマ性や士師のように外敵から守る軍事的強さは、民に歓迎されたのであろう。その一方で、主のみを主権者とするイスラエルの神

年、163-8 頁。また、Brooks は、くじで選ばれ、サウルが王として公認されたのがおそらく最古であると推測し、その上で対アンモン人戦に勝利したサウルの評判が彼の王位を確かにしたため、ギルガルでその即位が祝われたのであろうと見る。-Simcha Shalom Brooks, *Saul and the Monarchy: A New Look*, Society for Old Testament Study, Routledge, 2005, pp.48-9.

16) ibid., p. 47.

学的立場から、王制導入に否定的な人々がいたことは当然である。Brooks が指摘するように、イスラエルの王制に対する反発は、預言者ホセア（ホセア 8:4, 10:3, 15, 13:10-11）において顕著に示されている¹⁷⁾。Brooks は、「サウルが否定的に描写される理由は、彼が正気でなかったとか弱いリーダーであったからなどではなく、彼が最初の王であったからだ。さらにサウルへの批判の多くをテクストに挿入したのは、ダビデの行動の正当化を目指したプロ・ダビデの編集者だけでなく、神学的メッセージを伝えるためにサウル像を用いた預言者集団もそうであった。後に、サウルは北王国を代表したためにさらに否定的なプロパガンダの主体となったのである」と述べている¹⁸⁾。

Brooks の指摘が正しいなら、サウル個人が全否定されたわけではないということである。

また、ダビデ・ソロモンの統一王国の黄金期には、イスラエルの王制批判者もいなくなり、アンチ・サウルを唱える必要性もなくなったと考えられる。

それでもアンチ・サウルを掲げる必要があったのなら、それは歴史的に、まだサウル自身が力を持っていたか、サウル王家を支持する層の勢力が一定以上あった時に、サウルに否定的な考えを持つ人々がいたということだ。それらの人々とは、これまで一般にプロ・ダビデの人々（ユダ側）、もしくは王制そのものへの反対派であると考えられていた。しかし実際は、イスラエル内部とりわけエフライム族のうちに、ベニヤミン族から最初の王が出たことへの反感が少なからずあり、それが滲み出たと考えてもおかしくないのではないか。

2) サウル王の統治と戦果

そのサウル王の統治はどのようなものであったか。サムエル記上 13:1 の MT（マ

17) ibid., p. 46.

18) ibid., p.178. Brooks はここで、サウルは北王国を代表したと述べている。しかし、サウルは全イスラエルの王であって、分裂後の北王国の代表はヤロブアム（エフライム人）に帰せられるのが正しいだろう。統一王国が分裂した原因もサウルではなく、ソロモンにあつたとされる（王上 11）。

ソラ・テキスト) ではサウルの即位の年齢は欠けており、統治年間も不明瞭な書き方であるため、翻訳は様々であるが、聖書協会共同訳は「サウルは30歳で王位につき、12年間イスラエルを統治した」と訳出した¹⁹⁾。

これが史実に近いとすれば、サウルの治世は短命だったとは言えない。サウルの戦死後、息子イシュ・ボシェトが2年間王位にあった(サム下2:8-10)。サウルの王権は、確かに父子二代に及んだのである²⁰⁾。サウルの死後も、イシュ・ボシェトを擁立したサウル王家と南ユダの王となったダビデの家の戦いは長く続いた(サム下3:1)とあり、次第にダビデ家の勢力が増していくが、イスラエルがサウル家に仕える姿勢は根強く残っていたとも考えられる。

実際に、ベニヤミン部族自身もおそらくサウルの死後、サウル側とダビデ側に分断されていったのではないだろうか。地理的にも北(エフライム)と南(ユダ)の中間に位置するため、ベニヤミンの人々は政治的にも南につくか北に残るかの選択を絶えず迫られていたであろう。

これと同時に、エフライムを中心とする北のイスラエル諸部族の人々も、サウル王の治世以来、イスラエルは誰を支持するか、誰がイスラエルの指導者として立つべきかを巡って、水面下の動きが活発にあったであろう。実際、ソロモン王の死後、ヤロブアムが自分の王国を建てた。この時、エフライム部族からの初めての王が誕生し、シロのアヒヤの預言通りにベニヤミン族を含めた十部族をもって「全イスラエル」を支配したのである(王上11:35-37)。

3) サウルとヤベシュ・ギルアドの関係

サウルの治世は士師時代同様、近隣の諸民族との戦いが絶えなかった。サウルの統治と近隣住民との関係を考える上で非常に重要なのが、ヤベシ

19) 新改訳も同じ。新共同訳は「サウルは王となって1年でイスラエル全体の王となり、2年たったとき」。口語訳は「サウルは30歳で王の位につき、2年イスラエルを治めた」。

20) 前述のように、それ以前のエフライム族出身の指導者は一代限りだった。ただ、ダビデへの油注ぎ(サム上16:13、サム下2:4)とは対照的に、ここでイシュ・ボシェトへの油注ぎの儀式は記されていない。

ュ・ギルアドとの密接な関係である。

ヤベシュ・ギルアドはヨルダン川東岸の町で、サウル（ベニヤミン）との関連でたびたび言及される（士 19:21, サム上 11:1-10, 31:11-13；代上 10:11-12, サム下 2:4-7, 21:12-14）。

Cross は、クムラン文書（4QSam^a）の分析を通して、ルベンやガドのヨルダン川東側の 2 部族が先住民族のアンモン人に圧迫されていたことを指摘した²¹⁾。Cross によれば、MT では省略されていたその文書は、サムエル記上 10:27b を置き換える形で 10 章と 11 章の長い付加を含む²²⁾。その 4QSam^a の内容によると士師記 11 章（エフタの時代のイスラエルとアンモン人の衝突）におけるアンモン人ナハシュは、東部部族のルベン族およびガド族を相当圧迫して消滅させたか隸属させた可能性がある。その際、生き延びたルベンとガドの 7 千人の兵士は、ギルアドのヤベシュに逃れてきた。しかしそこにもナハシュは攻めてきて、町を包囲し（サム上 11:1），彼らを支配下に置こうとしたのであろう。それがサムエル記上 11 章の内容とみられる。

その時ナハシュは、ヤベシュ・ギルアドの「全員の右の目をえぐり出す」ことを契約の条件とした（同 11:2）が、彼らは 7 日間の猶予をもらい救いを求めたところ、サウルが全イスラエルに緊急出陣命令を出し、アンモン人を討った。その後、民はサウルを王とした（同 11:5-14）という。

21) F. M. Cross, 'The Ammonite Oppression of the Tribes of Gad and Reuben: Missing Verses From 1 Samuel 11 Found in 4QSamuel^a', *History, Historiography, and Interpretation: Studies in Biblical and Cuneiform Literatures*, (eds.) H. Tadmor, M. Weinfeld, The Magnes Press, Hebrew University, Jerusalem, 1984, pp.148-58.

22) ibid., pp.148-9. 4QSam^a の 10 列 6-9 行は、以下の通り。「そして、アンモン人の王ナハシュが、ルベンの子らとガドの子らを激しく圧迫した。そして彼は彼らの右の目をすべてえぐり出し、イスラエルに恐怖を与えた。ヨルダンの向こう側のイスラエルの子らはナハシュに右の目をえぐられなかった者はなかった。男 7 千人のみが、アンモン人から逃れてヤベシュ・ギルアドに来た。約一月後、アンモン人ナハシュは上って来てヤベシュ（・ギルアド）を包囲した。そしてヤベシュの男たち全員が（アンモン人）ナハシュに『我々と契約を結んでください。我々はあなたに仕えます』と言った。（アンモン人）ナハシュは『では、この通りにしてから、お前たちと契約を結ぼう……』と彼らに言った」（私訳）。

しかしここで、2日でサウルがユダを含む全イスラエル（サム上 11:7-8）²³⁾をもって挙兵し、アンモン人戦に勝利したという内容に誇張があることは否めない。この時サウルがナハシュを討ったという報告もない。Edelman は、この記事はサウルを、イスラエルを救い出すカリスマを呼びた大士師とみなし、「主の恐れ」を呼び起こし、全イスラエルを挙げて聖戦が行われたとする虚構であるとし、この編集の手は、サウルを王ではなく「士師」のスタイルとみなして貶めることでダビデを浮き上がらせる意図を持ったプロ・ダビデのものと想定する²⁴⁾。

しかしそうであれば、そのあとすぐ民がサムエルの呼びかけでギルガルへ行き、そこでサウルを王とした（サム上 11:14-15）という記事が続いている理由がよく説明できない。

むしろ、サウルを伝統的にイスラエルの指導者的立場の「士師」と同列にみなしたかったのは、実際にサウルの後に王を出したユダ（プロ・ダビデ）よりは、身近にいる隠れたアンチ・サウル、すなわち先に王を出せなかったイスラエル側のリーダー、エフライムであるとみなすほうが、蓋然性は高いのではないだろうか。

この時以来、サウルとヤベシュ・ギルアドとの間に軍事的な同盟関係が結ばれたのか、あるいはそれ以前に個人的なつながりがあったかどうかは分からない。いずれにせよ、この後もサウル／ベニヤミンと、ヤベシュ・ギルアドとの密接な関係性はしばしば言及され、とくに士師記 19-21 章において明瞭にしかも批判的に表現されているだけに、両者の関係は重要である。その後のダビデも両者の結びつきを非常に気にかけている（サム下 2:4b-7）点も注目される。

23) D. Edelman は、「ユダという部族は、ダビデ以前にはおそらくまとまった地に存在していなかった。ここで、特にユダが部族召集時に挿入されているのは、12 部族で構成される統一体としての王国時代前のイスラエルの後代の理想化に起因する」と述べる。-Diana Edelman, "Saul's Rescue of Jabesh-Gilead (1 Sam 11:1-11): Sorting Story from History", ZAW 96, 1984, p.206.

24) ibid.

4) ギルアドとエフライム

士師記 11:1-33 にギルアド人エフタがアンモン人と戦い屈服させた記事がある。これに関連して興味深いのは、士師記 12 章において、エフタの対アンモン人戦の時に声をかけられなかつたとして抗議したエフライム人が報復攻撃をしかけ、これをギルアドの人々が倒したという出来事が付与されていることだ。アンモンとの戦いの参加をめぐって、ギルアドとエフライムの反目がこのように記されているのは、非常に示唆的である。

エフライムの人々は、士師記 8:1 でも対ミディアン人戦に呼ばれなかつたとしてギデオン（マナセ族）を激しく責めたと記されている。ギデオンの懲罰な返答でエフライムの憤りは和らいだ（士 8:2-3）が、エフタのときは違う結果が生じた。こうした部族間の対立や反発感情を書き留めた生き生きとしたエピソードは、旧約聖書にあまり多くないだけに貴重である。ここには、エフライム人の敏感さ、あるいはプライドの高さが垣間見られる。武力においても強いエフライム人（詩 78:9）は、実は自分たちこそ歴史的にも地理的にもイスラエルの中心であると考えていたかもしれない。

ここで、あまり表面化されていないギルアドの歴史的変遷について論述する。サウルおよび士師エフタ²⁵⁾とも関係の深いギルアドの地には、複雑な歴史的背景があることを見ておきたい。

ギルアドは一般にガド族の地と理解される（サム上 13:7）が、士師記 12:4 によれば、ギルアドは「エフライムの逃亡者」**פָלַטִים אֶפְרַיִם** であったと言われる。これにより「ギレアド [=ギルアド]」が、東ヨルダンのガド族にではなく

25) エフタは、長老たちに懇願されギルアドの全住民のかしら（士 11:8）となってアンモン人と戦い、のちにイスラエルの士師とされた（士 12:7）。ヘルツベルグは、主からの召命と民の承認とによる二つの任命は、エフタとサウル王の選びに共通すると述べる。-H・W・ヘルツベルク著、小友聰・山本尚子・森田外雄・斎藤顯訳『ATD 旧約聖書註解 5/2 ヨシュア記・士師記・ルツ記』ATD・NTD 聖書註解刊行会、2000 年、452 頁。なお、筆者は、エフタの娘の悲劇の物語（士 11:34-39）は、父親のゆえに結婚で幸福になれなかつた（子を産まなかつた）娘の話として、サウルの娘ミカルの不幸（サム上 25:44、サム下 3:13-16、6:16-23）と通底するものがあると考える。

く、エフライム族から分裂した一部族に属していた」ことが説明されるという²⁶⁾。

士師記 12:2-3 でエフタがエフライムとの関係を重視している²⁷⁾ にもかかわらず、エフライムはギルアド人を「エフライムの逃亡者」と言って侮辱した。それは、元来ギルアドは「エフライムとマナセの間にいた」(士 12:4b, 私訳)²⁸⁾ からだという²⁹⁾。これがエフタを刺激したようで、ギルアドの人々はエフライムと戦い、これを討った(士 12:4)。この過激な反応は、ギルアドの人々は人々属していたイスラエルから離れて、ギルアドの地に逃れ住み着いたことを推測させる。さらに士師記 12:5-6 の記事は、エフライムと袂を分かったギルアドとの間の反目が、修復不可能な決裂に至ったことを意味していよう。士師記 12 章のエピソードは、エフライムの戦下あるいは政情不安から逃れてギルアドの地に住んだ人がいた時期、なおかつ、ギルアドの地がまだ他国によって占領されておらず、イスラエルの中に含まれると考えられた時期の出来事とみてよいだろう。それは、紀元前 772 年の北イスラエル王国の崩壊以前のことであろう³⁰⁾。

26) ヘルツベルク、同上、458 頁。

27) 同上。

28) 士師記 12:4b *בְּתוֹךְ אֲפֻרִים בְּתוֹךְ מַנֵּשָׁה גָּלְעָד מִתְּאַגָּם*

29) 上記の箇所を「エフライムの中、マナセの間でじっとしているがよい」とした聖書協会共同訳はかなりの意訳である(下線部筆者)。新共同訳は「ギレアドはエフライムの中、マナセの中にいるはずだ」。

30) ギルアドの地は、イスラエルがアモリ人の王シホンから戦い取ったもので(民 21:21 以下、申 2:24 以下)、モーセが半マナセ、ルベン、ガドの諸部族に与えた相続地である(ヨシュ 13:8 以下)。その後、ギルアドが他国によって占領されていたのは、イエフ王の時代(前 9 世紀後半—8 世紀初頭)に、アラムの王ハザエルによって奪われた(王下 10:32-33)が、イエフの子ヨアシュ(王下 13:25)、およびその息子ヤロブアム 2 世の代にすぐに奪還されている(王下 14:25)。その後、ユダの王アハズの時代、前 8 世紀にアッシリア帝国が北から攻めて来た時、サマリア陥落(前 722 年)の前にアッシリアの王はダマスコを攻めてこれを占領している(王下 16:9)。勢いに乗るアッシリア帝国はその後、「イスラエルの全土に攻め上った」(王下 17:5) とある。このとき、ガリラヤとギルアドは占領されたとみられる。アッシリアはサマリアに攻め上って 3 年間包囲したのち、これを占領して、イスラエル人を

また、ミツパという地名はギルアド地方にもあり³¹⁾、ベニヤミン領のミツパと混同されやすい。例えば士師記 10:17 は、ヤボク川北側の本来のギルアドと、ヤボク川南側のガド族の地にあるミツパに両陣営が敷かれたことを指している。しかし後代になると、ベテルとラマの間に位置する、ベニヤミン領のミツパが重要性を持ってくる。ギルアドについての旧約聖書の扱いは実に複雑で、特にギルアドがイスラエルに属するのかどうかについての記述が非常に不鮮明なのである。

おそらく、イスラエルはかなり早い段階からギルアドの地方を所有し、ルベン、ガド、半マナセの部族の嗣業としたが³²⁾、隣接するモアブ人やアンモン人らをはじめ諸外国からの脅威を断続的に受けており、それらの外敵の占領下に置かれていた時もあれば、ヨルダンの西側のイスラエルと自由に行き来できた時もあったのだろう。しかし分裂した北イスラエル王国末期には、ギルアドは、シリアから勢力を伸ばしてきたアッシリア帝国によって、サマリアの陥落

捕囚とし（王下 17:6）、代わりに諸外国人をサマリアに移住させた（王下 17:24）。紀元前 7 世紀に入るとアッシリアの勢力が衰退し、ユダのヨシャ王の時代に、サマリアの町やベテル、ゲバにおいて宗教改革を行うことができた（王下 23）のと同時に、いくぶん領土を回復したとみられる。しかしギルアドの地については、アッシリアの支配以来、明確に言及されなくなる。いちどアッシリアによって人種混淆が進んだギルアドの地は、その後イスラエルから切り離されていったようである。ギルアドは、新約時代にはデカポリス地方と呼ばれ（マコ 5:20）、ヨルダン川の西側のガリラヤやサマリアとは違い、異邦人の住む外国とみなされるようになっている。

31) 「ギルアドのミツパ」（士 11:29）。また、「ミツパ」とだけ記される箇所でも、士師 11:29 のほかに創世記 31:49、士師記 11:11 もギルアドのミツパを指している。

32) ギルアドは、最古の資料デボラの歌（士 5）で、イスラエルの戦いにおいて彼女の参戦の呼びかけに応じなかった 4 つの部族として名が挙げられている（士 5:17）。民数記 32 章によれば、ギルアドは、元はアモリ人が住んでいた地で、モーセによりルベンとガド族に与えられ（民 32:1, 26, 29, 40）、東のマナセの半部族にも与えられた（ヨシュ 22）。民数記 26:28-29, 36:1 では、マナセの子マキルの子であるギルアド、というように個人名と地名とが結びついて語られる点をみても、早い段階でイスラエルの所有地とされた地方であることが窺われる。詩編 60:9, 108:9、エレミヤ 22:6, 50:19 もギルアドがイスラエル所有の土地であったことを示す。ガド（部族）とギルアド（地方）が同定されることもあった（サム上 13:7、王下 10:33）。

(前 722 年) 以前に占領されており、それ以降回復されていない。つまりギルアドは、北王国滅亡時を境にイスラエルとは切り離されて、外国の地とみなされるようになったことは間違いない。

旧約聖書は、サマリア陥落以降のイスラエル（北王国）の記録を、驚くほどほとんど留めていない³³⁾のであるが、北王国滅亡後、存続したユダの大方の見方として、ギルアドはサマリアと同じかそれ以上に、非イスラエルとして批判的に捉えられるようになったものと考えられる。

それゆえ、（ヤベシュ・）ギルアドが言及される場合、このような歴史的変遷を考慮する必要がある。

5) 参戦の呼びかけをめぐって

士師記においてエフライムは、外敵との戦いに呼ばれなかったとしてギデオンとエフタに対して 2 回不服を述べていた。これとは逆に、イスラエルの敵に向かうため全部族が集結し参戦するように呼びかけたのは、デボラ（士 4:5）、サウル（サム上 11:7-9）および、「レビ人」なる男（士 19:29-20）である。この 3 つのいずれにも、ギルアドないしヤベシュ・ギルアドが関係している³⁴⁾。

士師記 21 章では、イスラエルに参戦しなかった部族（士 21:8）を問われてヤベシュ・ギルアドが調べ上げられたのだから、彼らはイスラエル“部族”に相当する扱いを受けていたことになる。士師記 5 章のデボラの歌はヨルダン川東にとどまり続けたギルアドに言及する（士 5:17）。しかし、他の部族表（創 49、民 1、26 など）には、もはやギルアドの名は出てこない³⁵⁾。

33) *The Last Days of the Kingdom of Israel*, (eds.) Shuichi Hasegawa, Christoph Levin, Karen Radner, De Gruyter, Berlin, 2019, pp.1-2.

34) ウェーバーは、これら、士師記 4-5 章、20 章、サム上 11 章の 3 箇所のみを聖戦として挙げている。-M. ウェーバー著、内田芳明訳『古代ユダヤ教』岩波文庫、1996 年、128 頁。

35) 並木は、デボラの歌は、そのほかの部族表とは区別されるべきだという。「デボラの歌は、参戦部族と不参戦部族を自由に言及するところに特色があって、部族順序を見出すのには不都合であり、また東ヨルダンのある地域の住民の指示のためにギレアデ〔ギルアド〕

ともあれ、イスラエルの全部族の中で主のもとに上らなかった（士 21:8）として名指しされたヤベシュ・ギルアドの町と住民は、士師記 21 章で滅ぼされる。彼らが救われたサムエル記上 11 章の裏返しのような話である。物語の設定上、ヤベシュ・ギルアドはイスラエルでありながら対ベニヤミン戦に集結しなかったとされるが、しかし実際に士師記 19-21 章が成立したのは、前述したように、ギルアドが非イスラエルとみなされてからのことであるのは間違いない。

結果として全イスラエルは、ベニヤミンの男性 600 人を残し、彼らにヤベシュ・ギルアドの処女を嫁として与えることでベニヤミン部族を絶滅から救ったが、反対にヤベシュ・ギルアドの住民を殲滅したのである。しかもその殲滅の命令は、共同体の派兵によって進められ、そこに主の命令に従ったとの言及はない。最終的に、イスラエルはベニヤミン部族を全滅させる代わりに、非イスラエルの（ヤベシュ・）ギルアドの住民に犠牲を払わせる、という形で決着した。

このことが士師記 19-21 章の重要な着地点であると考える³⁶⁾。

3 士師記 19-21 章と「ベニヤミン」

（省略）

4 小結論

イスラエル 12 部族の一翼を担うベニヤミンに焦点を当てた旧約聖書の箇所から、この部族の歴史的変遷を紐解いた。創世記においてイスラエル（ヤコブ）の愛息子として、またヨセフの大事な弟として描かれるベニヤミンは、その重要な位置付けに見合うだけの自発的な発言がない点が、この部族が置かれ

という地名が用いられているので、厳密には部族表の扱いができない」とした。-並木浩一『古代イスラエルとその周辺』新地書房、1979 年、106 頁。

36) 本論文第 5 章では、この後、士師記 19-21 章についてかなり詳しく論じているが、本稿では紙面の関係で省略した。士師記 19-21 章については、拙論「旧約聖書に隠された部族間の相克—ベニヤミン問題をめぐる考察—」（『伝道と神学』No.5、2015 年）163-189 頁も参照されたい。

た特徴を暗示している。

サムエル記において、ベニヤミン族から出たイスラエル初の王サウルと彼の家は、カリスマがありながらも力を封じ込められ下降する運命が描かれる。士師記 19-21 章では、ベニヤミンの汚行とそれを理由とする全イスラエルからの制裁戦争がクローズアップされる。一部族に集中した敵対視と廻断が描かれた根源はおそらく一つではなく複雑に入り組んでおり、ベニヤミンという部族と土地に関する歴史的変遷が絡んでいるのであろう。

ベニヤミンは古くからイスラエルを構成する部族として存在し、地理的にも政治的にも中心的な位置を占めてきたと見られるが、歴史的な激動の影響を受けて大きく変貌した部族である。北王国の盟主エフライムとの関係を離れて南ユダに組み込まれる転換を余儀なくされた。それだけにトラブルも発生したが、歴史の中で消失した多くの他部族と違って、ベニヤミンは叩かれても消滅せず、柔軟にしぶとく存続する。イスラエルにとってまさに「右の手の息子」なのである。

第6章 ユダについて

ここまで論じたイスラエル 12 部族の主要諸部族はどの部族もユダ族と深い関わりがあった。ユダとの関係性における影響を受けて、諸部族はそれぞれの運命をたどったのである。旧約聖書の最終形態において、ユダはイスラエル 12 部族における筆頭に位置付けられるが、これは所与のものでなく獲得したものである。それはダビデを輩出した部族であることと切り離せないが、そのことはイスラエルの歴史の流れの中で生じてきた変化であり、イスラエル全体にとって必要不可欠なことでもあったのだろう。その中心部族ユダの内側ではどんなことが生じていたのだろうか。

1 創世記におけるユダ

1) ユダの名、誕生物語

個人としてのユダ³⁷⁾ は、創世記 27-35 章のヤコブ物語において、族長ヤコ

ブとレアの間に生まれた第4子として登場する。12人の息子たち（部族）の中でもともとの順位は高くない。

ユダの名の由来は「(主を) ほめたたえる」³⁸⁾であるが、その名 **יְהוּדָה** に聖四文字 (**יהוה**) が含まれていることは特筆すべきことで、他の部族名にない特長である³⁹⁾。

また、創世記 29 章におけるルベン、シメオン、レビ、ユダの連續した誕生は、このレア系の主要な4部族が地理的には南方に位置する部族として古くから関わりがあったことを窺わせる⁴⁰⁾。

創世記の中では、レア系の主要な4人の息子たちに関して、彼らの行動に焦点を当てた個別の記事がある。レビとシメオンを中心とするシェケムでの事件（創 34）⁴¹⁾、長男ルベンが父の側女と通じた行為（創 35:22）、ユダと嫁タマル

37) 旧約聖書において「ユダ」の用例は約 820 回。地名、王国名としての用例が大部分で、部族名、個人名としての「ユダ」は 119 回ほど。

38) **תַּחַת** は本来は「投げる」という意味の動詞。Hifil 形で「感謝する、ほめたたえる、賛美する」という意味になる。人に対しても、神（信仰の対象）に対しても用いられる。ヤコブの祝福の言葉（創 49:8）の「ユダよ、兄弟はお前をほめたたえる」**קָדוֹם אֶתְנוֹתָרֶךָ** は、ユダの名と動詞 **תַּחַת** との言葉遊びとなっている。

39) TDOT 5, pp.482-3 によれば、「ユダ」の用例の回数は地名、部族、個人の順に多い。ユダの名はもともと地名であり、ユダの地に存在した部族が、祖先ユダに結び付けられた可能性がある。また、ユダの名の起源は神名と無関係ではないと考えられている。

40) 旧約最古の文献とされる士師記 5 章のイスラエルのカナンとの戦いに関する「デボラの歌」に、ルベンは言及されるがシメオン、レビ、ユダの名は登場しない。

41) 創世記 34 章のシェケムの事件についての考察は、第 2 章、および拙論「旧約聖書における『レビ』および『レビ人』について——主の担い手としての存在と働き」（『神学』83 号、2021 年、191-224 頁）193-9 頁を参照されたい。シェケムにおいて、妹のディナがその地の首長の息子によって結婚前に汚されたことに憤ったヤコブの息子たちは、結婚許可の条件として割礼を利用しての復讐を計画。レビとシメオンが中心となって、割礼の傷の痛みに苦しむシェケムの男たちを剣で殺し、妹を取り戻し、町全体を略奪した。父ヤコブはレビとシメオンを非難したが、妹が娼婦のように扱われてもいいのか、と二人は反論。このシェケムに関する古い伝承は、創世記 49:5-7 と関連している。この事件はとくにレビに関連が深く、イスラエルの間に分け、散らされるというレビの運命と、その主に仕える特別な使命を特に決定づけるものとなったと考えられる。

の交渉の出来事（創 38）である。それぞれ事情は異なるものの、いずれも男女の「婚姻」や「性的交渉」に関係する出来事であり、それも私的な密室の行為あるいは不祥事の報告である点で共通している。（しかし、それぞれのケースの「結果」は非常に異なる）。他方、ラケルの息子（ヨセフとベニヤミン）に関してはそのような記事はない。

レア系の主要な息子たちに関わる「婚姻」や男女の「性的交渉」にまつわる個別の独特な内容は、ヤコブとレアとラケル姉妹との結婚の経緯においても見られる（創 29:16-30）⁴²⁾。

ラケルは姿形が美しく（創 29:17b）、その美点のゆえにヤコブの愛を勝ち得たが、因習と策略によって妻としては第二位に引き下げられた。ラケルは夫の愛という「実」を得たが、レアはヤコブの第一の妻という「名」を得たのである。レアは、ヤコブの息子 12 人のうち、合計 6 人もの息子を自らヤコブに産んだ。この実績によって、レアは自分の名を高め、自らの子孫の数の上でも一家における勢力を増し加えることには成功したことが示唆される。

レア／ラケルの間の競争物語は、出産をめぐって非常にデリケートにバランスを取りながら展開する。両者の勢力は、母の胎内で押し争う双子のように（創 25:22-23、38:27-30）拮抗している。両者がバランスを取りながら競合し共存することは、イスラエルの繁栄と増強につながるということが暗示されているかもしれない。

同時に、子どもは注意深い計画のもとに生まれるとはいえ、「命の与え主は神のみである」という神学的に最重要なことがここで言われているのも確かである⁴³⁾。したがって、男女の「結婚関係」によって——それがどのように仕

42) ラケルは父ラバノンと姉レアに出し抜かれて、得るはずのヤコブの第一の妻の座を奪われ、順位が逆転した。しかも、この婚礼の夜の花嫁取り替え事件はひどい話に思われるが、嫁ぐのは姉が先である（創 29:26）という土地の風習を盾に、公然と非難されることもなかった。

43) Walter Brueggemann, *Genesis, Interpretation*, John Knox Press, 1983, p.255. (向井孝史訳『現代聖書注解 創世記』日本基督教団出版局、1986年)。

44) ルベンは、長男として父の力と祝福を継承する立場にあった（創 49:3）。しかしルベ

組まれ、賞賛されない（律法に反する）類のものであったとしても——、子が生まれ、子孫が続いたと記されることは、神の恵みによるものと認識されるであろう。言い換えると、子孫の継続の事実こそが、アブラハム以来の主の恵みと祝福の証しであると理解されうる。旧約聖書において、このような認識のプロセスは、レア系のユダの家およびダビデとその子孫に関して顕著に見られる傾向である。その多くは物語に埋め込まれる形で、暗に示されている。

2) 「ヨセフ物語」におけるユダの台頭

兄弟たちの中で順位の高くなかったユダは、いかにしてリーダー的存在を獲得していくのか。その過程を、創世記の「ヨセフ物語」の展開の中に見ていきたい。

「ヨセフ物語」の冒頭では弟ヨセフに対する長男ルベンの言動は、兄弟を代表し（創 37:21-23, 29-30）、父ヤコブの心情を代弁するものとして描かれていた（創 37:30, 34, cf.42:22）⁴⁴⁾。

しかし 42 章以降、変化する。末弟ベニヤミンの同行要求に対してのルベンのやや感情的で軽率な発言（創 42:37）と対照的に、ユダは 43 章以降、冷静に事の次第を父の前で説明し、ベニヤミンを連れていくことの必要性を説いた。このユダの発言（創 43:8-10）には、ルベンの子らを含め家族全員の命に

ンは、ラケルの死後、その召使いであった父の側女ビルハを自分のものにする（創 35:22）。しかも「このことはイスラエルの耳にも入った」（同）。これは、家長としての父ヤコブの権威を、長男ルベンが取って代わろうとする意思表示であろう。——この点は、シメオンとレビに関わる創世記 34 章のシェケムの事件の発端となった、青年シェケムがヤコブの娘ディナを恋い慕うあまりに、彼女を捕らえて寝て辱めた（創 34:2）行為の動機とは異なる。ルベンのしたことをヤコブは直接咎めなかつたが、ルベンはその自分の行為のゆえに、長子の特権を失うという代償を払うことになる（創 49:4；cf. レビ 18:8）。なお、歴史的に、ルベンは古い部族であったが、早いうちに勢力を失っていったと考えられている。申命記 33:6 参照。Gelander は、ルベンの失墜は、民数記 16 章に記される「コラの反逆」に、ルベンの一族が加わったことが決定的な敗因となって凋落したのではないかと推測する。-Shamai Gelander, *From Two Kingdoms to One Nation – Israel and Judah, Studies in Division and Unification*, Studia Semitica Neerlandica, Vol. 56, Brill, 2011, p.218.

対する責任と強い決意がにじみ出ている。とくに、自分が末弟ベニヤミンの保護者となる覚悟を表明して、父からの信頼を得た。ここにおいて、ルベンとユダの立場が逆転している。さらにこれ以降、ユダの優位は一層顕著なものとなる。「ユダと兄弟が」（創 44:14）という主語が用いられ、ユダが兄弟を代表して交渉に当たる。ユダは長い嘆願の言葉をヨセフに聞かせ（創 44:18-34）、父と弟ベニヤミンを思う殊勝な言葉でヨセフの心を動かした。こうして雄弁で家族思いで主導力のあるユダが、兄弟間の溝を修復するのに大きな役目を果たし⁴⁵⁾、ユダは父からも高く信頼される（創 46:28）。

このように、「ヨセフ物語」は、エジプトにおけるヨセフその人を中心に据えながらも、同時に、兄弟の中でのユダの立ち位置が確実に上昇していき、長子ルベンに代わる代表者として兄弟を統率していく展開をも、そのディテールにおいて如実に呈しているのである。

他方、ヨセフとユダの関係は、双方の母たちと同じようにデリケートに展開する。

ユダは父と一度は捨てた弟ヨセフに対して懲懃にふるまう。一方、宰相となったヨセフは、父から最期の願いを直に聞いており（創 47:27 以下）、莊厳な葬りを執り行って（創 50:1-14）父との約束を果たした。かつてヨセフの見た夢（創 37:5-11）は実現した。またヤコブは、死の前に、ヨセフの二人の子（エフライムとマナセ）を養子に迎えるために祝福を与えていた（創 48）。

父ヤコブの愛がラケルに注がれたように、「ヨセフ物語」を通してヤコブ／イスラエルの祝福の対象は、愛＝「実」の獲得者であるラケルの子らに向かうことへの固執があるのだ⁴⁶⁾。父ヤコブ／イスラエルとヨセフおよびベニヤミンの親兄弟の関係の調和は終始崩れず、堅固に貫かれている（創 43:14, 29 以

45) こうしたユダのとくにベニヤミンに対する主導的側面は、士師記 19-21 章の対ベニヤミン戦争においても明白に現れる（士 20:18）。士師記 1:1-4 参照。

46) 歴代誌上 5:1-2 には、「ルベンは長男であったが、父の寝床を汚したので、その長男の権利はイスラエルの子ヨセフの子らに与えられた。……兄弟の中で力があったのはユダで、そこから指導者が出了たが、長男の権利はヨセフのものとなった」と記される。

下, 44:30–31, 45:3, 13–14, 22–23, 28, 46:29–30, 48:22)。

しかしながら、話は単純ではない。父からは溺愛されたが兄たちから憎まれたヨセフは、実際はユダの提案によってエジプトに売り飛ばされた身だ。エジプト人の妻との間に子を得た（創 41:50–51）⁴⁷⁾段階で、ヨセフのエジプトでの位置は不動となつたが、同時にイスラエルの系図上では傍系となることが決定したのである。こうしてエジプトでは「名」を得たヨセフとヨセフの家は、持っていた「実」をベニヤミンとの関係も含めてユダに次第に譲り渡していくことになる。

また、創世記 49 章において「ヤコブの祝福」を受けるのは、言葉の分量から見ても、ユダとヨセフが双璧であるが、その内容は微妙に異なる⁴⁸⁾。ヨセフに対しては、6 回の「祝福」という言葉の連続（創 49:25–26）によって、ヨセフこそが父を通して神の祝福を受ける者であることが明示されている。一方、ユダに対しては、父からの直接の祝福の言葉はないが、イスラエル 12 部族の時代にリーダーとなるのはユダであること（創 49:8）と、イスラエルを統治する王権はユダのものであること（同 10 節）が示唆されている。

これらは明らかに、ユダ族出身のダビデから興されたダビデ王家（南ユダ王国）に言及したもので、付加的であろう⁴⁹⁾。なお、「ヤコブの祝福」で、上の 3 人の兄が排除され（ルベン：創 49:4, 35:22 / シメオンとレビ：創 49:5–7,

47) ヨセフはオンの祭司ポティ・フェラの娘アナセトを妻に迎え、彼女との間に、長男マナセ、次男エフライムを生んだ。オンの祭司は、エジプトの太陽神を司る最高位の聖職者である。これによってヨセフのエジプトでの高位は確実なものとなった。なお、ヨセフとマナセ（マキル）・エフライムとの関係や、イスラエルの起源に関する考察については、拙論「イスラエル 12 部族におけるマナセの位置」（『伝道と神学』No.9, 2019 年）85–100 頁を参照されたい。

48) 申命記 33 章の「モーセの祝福」においては、ヨセフには祝福と賛賛の言葉が集中するが、ユダに対する言葉はわずかで、祝福というより執り成しに近い。

49) フォン・ラートは、「歴史的に見れば、ユダはその王権によって初めて兄弟部族に優越する地位を獲得した。ユダは、王を出すことによって、それまでの孤立した存在から政治生活の中心へと彗星のように躍り出たのである」と述べる。G・フォン・ラート著、山我哲雄訳『ATD 旧約聖書註解 1 創世記下』ATD・NTD 聖書註解刊行会、1993 年、790 頁。

34章), 第4子のユダが兄弟の中の主導的立場に踊り出ることが「ヨセフ物語」の最後で確定される。

2 ユダの家の継続

「ヨセフ物語」において、ユダが他の兄弟たちを主導し政治的なイスラエルのリーダーとなってゆくことの正当性が示される足跡を見てきた。それは決してユダ一代限りの話ではないはずだ。「ユダの家」は主導的地位をいつまでも継承する必要があり、それには後継者となる子孫の存在が不可欠となろう。このテーマを裏付けるべく描かれているのが、創世記38章とルツ記であると考える。

1) ユダとタマル 創世記38章

創世記38章は「ヨセフ物語」の開始直後に挿入される形で、ユダの家庭に焦点があたるという特異性がある。一見するとユダ個人に関するネガティブで醜聞めいた内容が記されているようでいて、必ずしもそうではない。上の3人の兄たちと結果が異なるだけでなく、初めから複雑かつ巧妙な筋書きのもとに、「ユダの家」についての計り難い主の恵みと関与が物語られているのである。

ヤコブの息子の第四男のユダはカナン人シェアの娘と結婚し（これについての批判なし）、エル、オナン、シェラの3人の息子を得た。長男エルはタマル⁵⁰⁾と結婚したが死に、次男のオナンがタマルを妻に迎えたが、二人とも「主の意に反した」（創38:7, 10）かどで死ぬ（=主に殺される）という不吉な事が起こる⁵¹⁾。ここですでにユダの家の後継者が続くことは主の願いである。

50) タマルは、特に出自が記されないことから、イスラエル女性と考えられよう。タマルの名を持つ女性は、ユダの嫁のほかに、ダビデの娘でアブシャロムの妹のタマル（サム下13:1ほか）、およびアブシャロムの娘タマル（サム下14:27）がいて、ユダ／ダビデと非常に関係が深い名前である。タマルは、男性名詞で「なつめやし」。ただし、旧約偽典のヨベル書41:1、十二族長の遺訓ではユダの遺訓10:1において、タマルはアラム人の娘と書かれる。

ることが示唆されている。ユダはこれ以上の惨事を嫌い、残った息子シェラを惜しみ、制度（「レビラート婚」：申 25:5 以下）を無視して、寡婦となったタマルを不当に扱った⁵²⁾。ユダは、家の後継ぎ問題を放置して、嫁タマルと主に対する違反行為を行なっている。しかし、タマルの大胆な行動によって彼女はユダの子を身ごもった⁵³⁾。タマルは姦淫の罪を疑われたが、子の父親はユダであると証明してみせた。タマルは自分の行動の正当性を認めさせ、生まれる子が私生児になるのを防ぎ、子と自分とユダの家を守ったのである。こうしてユダ個人の隠れた行為は、タマルの妊娠によって暴露される⁵⁴⁾がユダも守られた。なんら非難されることなく、タマルを通して律法義務を果たす結果となり、ユダの家の「名」は守られ（申 25:10）、子孫まで与えられるという祝福を与えられた。

タマルが産んだ息子のうちペレツの家系からダビデが生まれた（ルツ 4:18-

51) Amit は、創世記 38 章には明からさまではないが、ユダがカナンの女性シュアと結婚していることに関してユダの家系（ダビデ）への隠れた批判（Polemics）が含まれているのではないかと見る。-Yairah Amit, *Hidden Polemics in Biblical Narrative* (trans. by Jonathan Chipman), Biblical Interpretation Series v. 25, Brill, 2000, pp.79-80. たしかに、創世記 38 章は外国人（カナン人）との結婚を批判していないが、シュアではなくイスラエルの女性タマルが産んだペレツの系列が主軸になるという結果が全てを物語っているのかもしれない。アブラハムもヨセフもエジプト女性と関係したが、ハガルの子イシュマエルは傍系であり、ヨセフとエジプト人妻の子とされるマナセとエフライムは、ヤコブの養子になったとはいえ、北王国は滅亡し外国人との混血が進んだという運命も考え合わせると、創世記 38 章は、ユダの家系の正統性を、ヨセフの家に対して暗に主張していると見ることができる。

52) 「古代社会ではこのような場合、死を齋した原因是その女性自体にあると見られたため」である。-フォン・ラート『創世記下』663 頁。

53) なお、この箇所の舞台ティムナ（創 38:12）はサムソンの物語と共に通する（士 14）が、サムソンはペリシテ人の妻に翻弄されたあげく友人に取られ、サムソンと妻の間に子は与えられていない（士 14:20-15:6）。サムソンの破壊的行為は、ユダにとってペリシテ人の脅威を増大させ、ユダの兵士はサムソンをペリシテの手に渡そうとしたと記される（士 15:9-13）。この点で、サムソンと、ペリシテ軍によって戦死したサウルのイメージとが重なる。

54) 聖書において、家庭外の女性との一度の交渉による妊娠でその関係が暴露されたエピソードは、他にはサムエル記下 11 章のダビデとバト・シェバの関係が唯一挙げられる。

22. 代上 2:3-14；マタ 1:3-6, ルカ 3:31-33)。結果、主の特別な恵みはダビデへと向かうという主張になる。

創世記 38 章の語りにおいてユダのイノセンス（不関与）が強調されることで、息子たちの罪やユダの無知や勘違いを覆うようにして、ユダの家を恵み、生の起点に関与する主の存在が浮かび上がる。この出来事の結実である子の妊娠に真に関わるのは、人間的な過ちの罪を赦し、ユダの家に新しい命の継承をもたらす意志をもった主であることが主張されるのである⁵⁵⁾。

創世記 38 章には、ダビデを生み出したユダの家系が、過去、現在を経て将来的にも継続することへの願望とその拠り所が明示されていると言ってよいであろう。創世記 38 章は、いわば物語られたユダ部族の系図であり、また「ヤコブ物語」と「ヨセフ物語」の中間に挿入される形で位置を占めた「ユダ物語」と言えるのではないか⁵⁶⁾。

子が与えられることは、まさに神の providence (摂理) と呼ばれるにふさわしい出来事であろう。神の摂理は子の妊娠に結びつく。聖書においてこのことは、特にイスラエルを存続の危機から救い、生き延びさせようとして、主が選ばれた女性の胎を開き、子を生まれさせるという語りや筋書きの中に多く埋め込まれている。これは、とりわけ特徴的にユダの系図に結びついているのである⁵⁷⁾。

その意図は、ユダから出たダビデの家の、イスラエル指導者としての正当性やその王権の優位性の主張のためであろう。イスラエル 12 部族内部のユダの対抗勢力（ヨセフの家、北イスラエル王国、ベニヤミン族など）に対して、歴史的なある時期においてその必要があったということだ。

55) Amit, op.cit.

56) 創世記 38:27 以下で、双子の出産時に、先に出した手に初子のしるしとしての真紅の糸を付けられたがその手を引っ込んだゼラ (=起きる／輝く) と、そこに割り込んで先に生まれたペレツ (=割り込む／出し抜く) の名と対比とが、ラケル (ヨセフ・北王国) とレア (ユダ・南王国) の対立・競争関係を比喩的に表現していると考えられる。

57) 創世記 4:1, 21:1-2, 25:21-23, 29:31, 30:5-6, 17, 22, 士師記 13:1-24, ルツ記 4:13, サムエル記上 1:19-20；マタイ 1:18 以下、ルカ 1:13-25, 1:30-37。

しかしそれだけではない。そうした過去の歴史を踏まえつつ、北王国滅亡後、南ユダ王国が事実上、唯一のイスラエルの継承者となり、さらに紀元前 6 世紀にその南ユダ王国も滅んだのちにも、主の恵みによってダビデ王家／ユダ族の血筋は「いつまでも」続くという希望が、ユダ内部に興り、それがまた全イスラエルの終末論的な希望となってこの一本の線に集中化しているのである。

2) ユダとダビデをつなぐ「ルツ記」

ユダの家庭内ドラマのような創世記 38 章と類似する趣旨とエピソードが「ルツ記」にもある。

創世記 38 章冒頭において、ユダの 2 人の息子が死んで後継者がいなくなる危機に陥ったように、ルツ記冒頭で「ユダのベツレヘム出身のエフラタ人」⁵⁸⁾の一家の 2 人の息子の死が語られる。息子たちに子はなく、母ナオミと 2 人の嫁が残された。将来子孫が与えられる見通しはない。

ルツ記 4 章では、結局、近親者ボアズが「ゴーエール」（贖う人）となって畠を買い取り、嫁ルツも妻として買い取り、子も生まれるという幸いな結果が記される。ナオミ、ルツ、ボアズは全員、自覚的に行動し、家名存続のために貢献した。彼らは、ルツ記 4:11 以下にあるように「タマルがユダに産んだペレツの家のようになるように」願われ、主の祝福を受ける。「オベドはエッサイをもうけ、エッサイはダビデをもうけた」（ルツ 4:22）。

こうしてダビデの曾祖父母にあたる家族の美しい物語は、「ダビデ」の誕生につながることで、非常に重要な存在意義と格段の輝きを放つ。ルツ記は、「士師たちが世を治めていた頃」（ルツ 1:1）という時代設定に始まり、最後の後は「ダビデを」（ルツ 4:22）で結ばれていて、これが物語全体の枠組みを成しているとみれば、士師の時代にイスラエルを治める王（=ダビデ）の登場が待たれていたという背景によく合致する⁵⁹⁾。

58) ルツ記 1:1 אֲפָרָתִים מִבֵּית לְחֶם יְהוָה, および 1:2 אִישׁ מִבֵּית לְחֶם יְהוָה

59) 左近淑『旧約の学び 下——ルツ物語・ダビデ王物語』日本基督教団出版局, 1982

ルツ記は、イスラエル全体を統率する主柱としてのダビデ王家とユダ部族に寄与するために書かれた文書であることは間違いない。とりわけ、その一つの家系の存続が問題の焦点となっており、ルツ記の「以前」（ユダ）と「以後」（ダビデ）を系統的につなぐ役割を果たしていると言える⁶⁰⁾。

ルツ記が創世記38章をふまえていることは、ルツ記4:12で明らかである。

ルツ記3章でナオミが計画して、夜中にルツをボアズの寝床の衣の下に送りこんだ（ルツ3:1-4）ことは、実は大胆でスキャンダラスなことであった。しかし前述したように、同じ類のことが彼らの先祖においても行われている⁶¹⁾。いずれも公然と批判や処罰を受けないだけの因習的理由（＝ゴーエール、レビラート婚、嫁ぐ順番など）があり、結果として息子が生まれる。彼ら（ユダ、ペレツ、オベド）は皆、イスラエルを治める王ダビデに連なる系譜の主要人物として覚えられる⁶²⁾。

子どもが与えられることと並んで、ルツ記のもう一つのテーマは、土地への回帰であろう。ルツ記では、飢饉でモアブに寄留していたエリメレクの一家が、悲劇を経験した後、本来の居住地に戻ることが切実に願われている。ルツ記が書かれた年代について、研究者の見解は様々で、特定されていない⁶³⁾

年、44-5頁参照。

60) 同上、47頁。

61) すなわち、嫁タマルが計画して、息子を与えない舅ユダの懷に自身を与えたこと（創38）、および舅ラバンが計画して、婿ヤコブの寝床に、長女レアを先に与えたこと（創29）をさす。

62) 創世記16章で、妻サラ（イ）が計画して、夫アブラ（ハ）ムに女奴隸ハガルを与えたことも、行動としては同じ類に相当すると考えるが、エジプト人ハガルがアブラハムに生んだ息子イシュマエルはイスラエルの系譜ではなく、サラから生まれたイサクが後継者となるため、ここでは同列としない。

63) 左近淑は、ルツ記の著作年代について、研究者の意見は初期王国期（キャンベル、ホールスなど）、捕囚前（ルドルフ、ヴィツエンラートなど）、捕囚期（イエプツェン）、捕囚後（フォーラー、カイザー、スマント、ソジンなど最近の大部分の緒論、ゴーディス、閔根など）と大きく分かれており、サッソン、チャイルズもこの点について決定的発言を避けているとし、この文学小品の年代を決定する証拠を有していないと見る。-石田友雄、木田献一、左近淑、西村俊昭、野本真也著『総説 旧約聖書』日本基督教団出版局、1984年、

が、この二つのテーマから考えると、ルツ記が書かれたのは、王国時代や捕囚前ではなく、国の崩壊と悲劇を経験した捕囚期以後であろう⁶⁴⁾。

王国崩壊後のイスラエル存続の望みは、おそらくダビデ／ユダの系譜において最も強く表出される道筋を取り、その後の民族復興の希望をダビデの王家の継続につなぐという流れが生じたとしても不思議はない。この点は、他の部族、とりわけ最初の王サウルを出したベニヤミンについても、旧約聖書においてほとんど表面化していない傾向であると言える⁶⁵⁾。

それゆえルツ記においては、物語の舞台となる土地ベツレヘムもダビデと深く結びついている。

3 ダビデの家について

これまでの創世記 38 章、ルツ記を中心とする論述を踏まえた上で、両者が指し示しているダビデとダビデの家について考察してゆきたい。

1) ダビデの出自

ダビデの出身地は、ユダのベツレヘムであると明言される。ルツ一ボアズの間に生まれたオベドにダビデの父エッサイが生まれたとされる（ルツ 4:17, 21-22）⁶⁶⁾。

495-6 頁。

64) Walter Brueggemann, "Heir and Land: The Royal 'Envelope' of the Books of Kings", *The Fate of King David: The Past and Present of a Biblical Icon*, eds., Tod Linafelt, Claudia V. Camp and Timothy Beal, T & T Clark, 2010, pp.85-100 参照。

65) 例えば、ベニヤミン族の主人公を中心とする「エスティル記」では、バビロン捕囚後、祖国に帰還せず異国（ペルシアのスサ）に生活するユダヤ民族に対する迫害からの救いがテーマであって、子孫の継続や土地の回復への言及はない。

66) ダビデには上に 7 人の兄たちがいたが、サムエルがベツレヘムに来て生贊をささげた儀式の際にも、末子で 8 番目の息子ダビデは他所で羊の群れの番をしており（サム上 16:10 以下、17:12-15）、家庭の中では軽んじられていた。ルツ記においては、ナオミにとって、「あなたを愛する嫁、7 人の息子にもまさるあの嫁」（ルツ 4:15）であるルツが産んだ子（ペレツ）が、ダビデ（8 番目の息子）につながった。

ただ、ペレツの系図がダビデにつながったと記すのは、ルツ記 4:18-22 と歴代誌上 2:5-15 のみである。サムエル記ではダビデの出自は「ユダのベツレヘムのエフラタ人エッサイの息子」（サム上 16, 17:12）とだけ記される。サウルの先祖が 5 代前まで遡って記される（サム上 9:1）のとは対照的である。ペレツの系図にダビデをつなげるのは、ダビデが「イスラエル」の正統的な部族から出た王であるとの主張のもとに、後代に縫い合わされたものではないかという疑問を生じさせる。

また、ダビデの曾祖母とされるルツがモアブの女性であることをどう捉えたらしいのか⁶⁷⁾。旧約聖書においてモアブは背信的な民として否定的に描かれことが多い（創 19:36-37, 民 25:1-5 など）。そのモアブ女性の血がダビデに流れていることをルツ記の著者は隠さない。

実際にダビデは、サウル王からの逃亡中、一時的に両親の保護をモアブの王に託したことがあり（サム上 22:3-4）⁶⁸⁾、モアブとの親戚関係は明らかである。ダビデとモアブとの親戚関係は明確だが、後にダビデはモアブ人への過酷な措置を下してもいて（サム下 8:2），搖らぎがある。

また、イスラエルの宿敵とされるアンモン人との間でもダビデは微妙に上手く立ち回っている。

ダビデは第 5 章で触れたアンモン人のナハシュとの間に何らかの友好ないし利害関係があったようだ（サム下 10 章、17:27 以下）⁶⁹⁾。

67) ルツは、姑ナオミの信仰を受け入れて心はイスラエルに帰属した（ルツ 1:16-17）とも考えられる。しかしルツは終始「モアブの女ルツ」（2:2, 21, 4:5, 10）、「モアブの娘」（2:6）と呼ばれ記される。しかもボアズに妻として「買い取られる」（4:5, 10）立場である。ここにイスラエルは、信仰において周辺民族を包括するものの、一方でユダヤ民族主義的には、他民族との区別を排除しない姿勢を窺い見ることができる。

68) ここで唯一、ダビデの父母／両親の存在についての言及がある。ダビデの父エッサイの妻の名はどこにも記されず、ダビデの母が「不明」であるのは、考えてみれば非常に不自然なことだ。ダビデの母の名と存在を表に出せない事情があったのだろうか。

69) サム下 17:25, 代上 2:16 の系図を総合すると、ナハシュの妻は、エッサイの妻でダビデの母、であるようにも読める。少なくともダビデの家は、アンモン人との友好的な関係にあったことは疑いようがない。

サムエル記下 8 章に列挙される諸外国の民がすべてダビデの戦勝相手でなかったとしても、ダビデは以前からの卓越した政治手腕や外交努力によって、周辺に住む彼らと手を結び、協力・友好関係を築き上げ始めていたということは十分考えられよう。ユダの一部族だけでは支持の足りない部分を補うため、ダビデはそうした周辺の諸民族を上手に取り込み懐柔することで、王国の勢力を保とうと努めていたのではないだろうか⁷⁰⁾。

2) ダビデの台頭と部族間の関係

では、もともとサウルに仕えていたダビデの一家の末子のダビデが、どのようにユダとイスラエルを統治して、統一王国の王になっていったのか。

サウル王を見限ったサムエル（サム上 15）は、主が見出した少年ダビデに油を注ぐ（サム上 16）。サウルはダビデを気に入り召しかかえるが、サムエル記上 18 章において両者は乖離していく。サウル王の敵意や懸念が一方的に描かれ（サム上 18:8-9），ダビデが王位を狙う謀反人であるとサウルが疑っていたこと（サム上 20:31）を暗示させる。サウルに着せられたこの妬みや猜疑心は、ベニヤミンとユダの確執の原点か象徴のように思われる。一方ダビデは、サウルの長子ヨナタンと次女ミカルとの強い結びつきもあって、サウルの家臣から親戚（娘婿）へと身分が上昇した。

ダビデがサウルの王位に対する「野心」を抱いていたかどうかは明示されない。だが逆に、明示されないことによって、創世記 38 章やルツ記に見られるように、実現した結果をもって、個人の狙いや計画を超えて働く主のご計画を理解する方へと読者は促されてゆくのである。

いずれにしてもダビデはサウル王に見出され、その家族・近親者をも惹きつけ、さらに自ら手を汚すことなく（篡奪者でなく）、サウル家の王権さえもダビデの手に正当的に移されていく。

70) もしそうしたことが周知の事であったなら、創世記 19:30 以下のモアブとアンモンに関する記事は、逆にダビデへの隠れた痛烈な批判を込めて書かれたものである可能性が浮上しよう。

ダビデは、逆にサウル王家に同化されることはなかったのだろうか。それはありえたかもしれないが、ダビデは、結局ベニヤミン部族にはなびかず、ダビデの部族ユダの名を負ってゆくのである。

ドゥ・ヴォーは、モーヴィンケルらによる、ユダの部族はダビデの時期以前には形成されなかつたとの結論を支持し、「ユダの部族がその眞の同一性を見出したのはダビデの下においてであり、またダビデによってであるように思われる」と述べている⁷¹⁾。

de Geus もこれを敷衍し、部族ユダについて、以下のように指摘している⁷²⁾。

① のちの“ユダ”は以下のような人々の集団の複合体である。

a) シメオンの残りの者たち⁷³⁾ のような古来のイスラエル人、おそらくヘブロン近辺にいたレビ人の集団、テコアやベツレヘムのような土地の氏族たち、さらにエフライム人の集団

b) カレブ人、エラフメエル人、ケニ人 c) カナンの少数集団

② ユダに関しては古い境界線が存在しない。今ある境界線は、単純にカナンの南と南西の国境である。東側は自然の境界で、ユダの北側の境界線はダビデ下の状況を反映したものである。

③ ユダにはカナン入植およびカナン征服の伝承が全くない。

たしかにダビデは「ベツレヘムのエッサイの息子」(サム上 16:1, 17:58), 「ユダのベツレヘム出身のエフラタ人工エッサイの息子」(サム上 17:12) とだけ説明され、ユダ族であるとは言明されない。もし仮に、ダビデとその家が伝統的な“イスラエル 12 部族の中心的存在のユダ族”に属していたのなら、サウ

71) R. ドゥ・ヴォー『イスラエル古代史』756-7 頁。これによりデボラの歌（士 5）にユダがないことの説明がつく。

72) de Geus, C. H. J., *The Tribes of Israel: An Investigation into Some of the Presuppositions of Martin Noth's Amphictyon Hypothesis*, Van Gorcum, 1976, p.112.

73) シメオンの部族は、申命記 33 章には欠如しており、ドゥ・ヴォーは「この部族がすでにユダによって吸収されたと説明する以外には説明され得ない」としている。前掲書、756 頁。

ルの息子ヨナタンがダビデの家と契約を結んで、ダビデに敵対する者は主から報復されるように（サム上 20:16）と安全保障を誓う必要もなかっただろう。

それではいつ、ユダはイスラエルの一部族となっていったのか。

サウル王は、少年ダビデを召したのち、やがて彼を妬み、激しく敵視するようになってしまった。こうした描写は、実はサウル／ベニヤミンが急速に台頭し接近してきたダビデ／ユダを非常に警戒し、遠ざけようとしたことの反映だったのではないか。しかし彼の次の世代は違った。サウルの息子ヨナタン⁷⁴⁾と娘のミカルはダビデを主体的に「愛する」ことで彼を受け入れたことが明記されている。

このヨナタンとミカルのダビデへの非常に大きな好意は、当時イスラエルを統治していたベニヤミン族のサウル王家が、ダビデとその背後にあるダビデの家をイスラエルの王位に就く家として認めたということを（史実はともかく）示す目的で書かれたのであろう。まさに「ダビデの家と契約を結んだ」（サム上 20:16, 22:8）ヨナタンと、ダビデと結婚したミカル⁷⁵⁾とが、ダビデの命を付け狙うダビデの宿敵・父サウルの手から守り（サム上 19:1-17, 20:1 以下）、それと共に、結果的にユダ部族の成立を助けたと言えるのではないだろうか。

ダビデの逃亡中にも、ヨナタンとダビデは主の前で契約を結び（サム上 23:15 以下）、最終的には、サウル自身もダビデが王位を継ぐことを認めている（サム上 24:21）。

こうした記述はおそらく後代の挿入であろうが、この時ダビデ／ユダはイス

74) サムエル記上 14:1-46 には、ヨナタンが父サウルにもまさる優れた武将であり、兵士たちへの労いと責任を負う英雄であることが記され、サウルとの対照が鮮明にされている。サムエル記上 30 章のダビデの兵士への配慮ある振る舞いとも共通するように思われる。しかし、サウルが退けられることになるアマレク人との戦い（サム上 15）では、不思議なことにヨナタンの姿はない。

75) サムエル記上 18:28 は「サウルは、主がダビデと共におられる事、娘ミカルがダビデを愛していることを見て、知った」（私訳）と記し、この二つの事象を並列に置き、同じくらいの重さで受け止めていることに注意。

ラエルの一員として、サウル家／ベニヤミンと盟約を結んだことが暗示されているように思われる。またここにおいて、捕囚を経験する崩壊期に、ユダとベニヤミンが共存することを通して、主の民「イスラエル」を永続的にあるいは終末論的に築いていく礎としていくことも示されている。

ダビデの王権は、このようにサウル王の後に確立することを希求されることによって初めて、確実に無理なくイスラエルの上に定着することが可能になるのである。それと同時に、ダビデの部族ユダは、イスラエルを構成する「一部族」としての存在を確保していく一歩を得たのだと考えられる。

このような手続きがなければ、ダビデ以前にはなかったとみられる未形成の「ユダ」が、古来より存続していた「イスラエル」に迎え入れられ、融合し、さらに君臨してゆくことは不可能であったのではないだろうか。その意味で、ユダ（ダビデ）のためにベニヤミン（サウル）の果たしていた役割は、無視できないほど大きかったということが言える。

ダビデが踊り出るのは、ペリシテ軍に敗れたサウルとヨナタンの死後（サム上 31）であった。

ダビデは、まず主の託宣を受けてヘブロンに上ると、ユダの人々はダビデに油を注ぎ、「ユダの家の王」*מלך־בֵּית יְהוָה*とした（サム下 2:1-4）。ダビデは、ベツレヘムにおいてすでにサムエルの手により主の御前に油を注がれていた（サム上 16）ので、ヘブロンでの油注ぎはユダの人々にとって初めての自分たちの王に対する即位儀式である。このダビデを自分たちのユダの王とした段階で、ユダの人々は部族的「ユダ」としての統一体を形成し始めたと言えるのではないか。

3) ダビデの王位とサウルの家との確執

ダビデはサウル王の死後ヘブロンでユダの王となったが、それだけに止まらない。ヘブロンにいる7年半の間に、イスラエルの支配権も手に入れていく。

ダビデは、自分の王権はイスラエルを統治していたサウル王家から連続するものと考えていたことは間違いないだろう。サウルに油を注いだサムエルその

人が、次にダビデに油を注いだこと（サム上 16:13）も、このサウルからダビデへの連続性を浮き上がらせる。この関係は、複雑な歴史的経過を経て、後の「ユダとベニヤミン」の共存関係の基礎になったと考えられる（第7章で論述）。

ダビデ即位の時、イスラエルの全部族が「私たちはあなたの骨肉です」**אַנְחָנוּ כְּבָדֶךָ וְכָמֹצֵעַ** と述べた（サム下 5:1, cf. 19:13）。ここにおいて、ダビデの部族ユダはついにイスラエルの全部族と骨肉を分けた兄弟であるとの宣言を受けたと言ってよいであろう。

ダビデの行動は、ベニヤミンの人々やサウル王家を巻き込んで、激動をもたらしたが、結果として、サウル家ではなくダビデの家の王権を堅固にする流れが生じている。そこに通底するのは、主に対する責任を優先させるダビデの信仰の姿勢と、これと呼応するようにダビデとその家を確固として導かれる見える主の存在である。数多くの詩編に表現されるように、主に完全に依り頼むダビデの信仰の姿勢とダビデを愛し恵まれる主の導きとが固く結びついていること、イスラエルに信仰にある平和をもたらしたことを、読者もまた受け取るようになるのである。

ダビデはこうしてサウル王が成し遂げられなかった、ユダを含む全イスラエルの支配を実現した。その拠点としてベニヤミン領内の要害エルサレムを、ダビデ王がエブス人から奪い取り、ヘブロンに代わる都（サム下 5）としたのは最善の選択だったのである。

その後、サムエル記下 14 章以下 20 章に至るまで、アブシャロムの事件とダビデ王への反逆、その影響が異例とも思える長い紙面を割いて記されている。この内容は表面上ダビデと息子アブシャロムの対立のように見えるが、水面下では、どちらの王を支持するかでベニヤミン（イスラエル）とユダの人々の思惑が交差し、ぎくしゃくする流れが起こった記録が埋め込まれているのである。

この時期の攻防とダビデの行動によって、実はダビデが信頼しているのは自分の身内のユダの人々であって、ベニヤミンをはじめとするイスラエルの北の諸部族との間には身内意識はなかったことが露呈してしまう。それゆえ、ビク

リの子シェバの放った「ダビデのうちに、我々の受け取るべき分はない。エッサイの子のうちに我々の受け継ぐべき分はない。イスラエルよ、それぞれ自分の天幕に帰るがよい」（サム下 20:1, cf. 王上 12:16）という毒舌は、それなりに的を射た評価である。ベニヤミン族のシェバは、復帰した王ダビデに対し、ユダと共有するものは本来なかったイスラエル（北部族）の正当性、優位性を主張し、イスラエルの人々のプライドを刺激することに成功したと思われる。この事件をきっかけに、ダビデ／ユダとベニヤミン／イスラエルの関係は再び硬直化し始めたのではないだろうか。

ヘルツベルクはシェバを評して、「ベニヤミン族は北と南の中間に位置する境界部族であり、他の場合でも、イスラエルの全体構造の中で或る種の不安定要因をなしている部族なのである」と断言し⁷⁶⁾、「そのような〔シェバのようなサウルと同じ氏族の〕人々のサークルが、ダビデの王国で不穏の種であったことは、当然のこととして理解できる」⁷⁷⁾と述べている。

この指摘はもっともで、ベニヤミン部族をダビデの王権に対する不安定で不穏の種であると思わせるのは、おそらくこの箇所の筆者の意図なのである。そして、そのようなベニヤミン族に対する否定的な先入観を読者に持たせるのに最も貢献しているのが、士師記 19-21 章なのではないだろうか。

4) ダビデの王国の発展と分裂

ダビデ・ソロモンの王国の発展に伴って、ユダ部族の位置はイスラエル全部族の中で大きく飛躍したことは間違いない。ユダ以外の諸部族はこれをどう受け止めていただろうか。

ダビデの生存中は、おそらく問題は表出せず、後継者ソロモン王の時代の終わり頃までは、部族間の問題はたまりつつあるも噴出はしなかっただろう。ソロモンは父王ダビデから託された神殿建築を果たし、主の契約の箱を神殿の至

76) H. W. ヘルツベルク著、山我哲雄訳『ATD 旧約聖書註解7 サムエル記下2章—24章』ATD・NTD 聖書註解刊行会、1998年、286頁。

77) 同上、287頁。

聖所に収めた（王上 8）。また、イスラエル全土に 12 人の知事を置いて統治した（王上 4:7-19）。ソロモンの時代に王国は栄華を極めた。このように政治的・経済的に大繁栄した時代には、サウルの時のような王制そのものに反対する勢力は抑えられていたであろう。ただ、ソロモンの事業ではイスラエルの民を奴隸にこそしなかった（王上 9:22）が、ソロモンはイスラエルに過酷な労働と重い轭を課したとされる（王上 12:4-14）。このような王の方針は、エジプトでの苦役から主に救い出された歴史の上に立つイスラエルの民の不満につながらないはずはなかっただろう。

ソロモン王は知恵と富を与えられたが、多くの外国の女性を愛することによって主に対する背信を犯した（王上 11:1-8）ことも問題視される。主は怒りを発せられ、ソロモン王の個人の行いによる背信の罪が、王国分裂の原因として定められる（王上 11:9-12）。

主の言われた通り、イスラエルは主に背いたダビデの家に背き、ダビデの家に従ったのはユダ族のみとなる（王上 12:19-20）のである⁷⁸⁾。ダビデと違い、ソロモン王は主を離れた。次のレハブアム王は民心を得ず、イスラエルはダビデの家に失望して離れ、分断状態に戻ってしまう。こうして、ユダ（統一王国）から分裂したエフライム部族を中心とする北イスラエル王国が成立する。

しかし主の御心に反して、ヤロブアムは祭儀的な罪（金の子牛の像を置き、非レビ人を祭司にした：王上 12:25 以下）を当初から犯したとされ、北王国は南ユダ王国と反目したまま、いくたびかの政情不安を経たのちアッシリア帝国によって滅亡する。ヤロブアムに与えられた「十の部族」の消息も絶えてしまう。神の民「イスラエル」は歴史上、完全消滅に近い状況になった。

南ユダのダビデの王家は、より長く存続した。単一部族のユダの方が、結束がよく、外敵からの圧力に耐えられたのかもしれない。

一方、多く言われているように、北から逃れてきたイスラエルの指導的立場

78) しかし、列王記上 12:21 には、ユダの家の全員にベニヤミン族から 18 万人の戦士が加わったとされ、「ユダとベニヤミン」が協力関係にあるように記されている。後代の付加であろう。

の人々やレビ人や祭司たちがエルサレム周辺地域、すなわちベニヤミン領を中心とする土地に移り住んでいた可能性がある。とすれば、そうした人々の間では間違いなく「イスラエル」の名と伝統は継承されていたはずで、それは南ユダ王朝にも流れ込んでいたであろう。かくしてユダは、それまでにイスラエルが有していた多くの重要なものを獲得し、それらの上にさらに主の栄光を増し加えることになる。すなわち、王権とエルサレム神殿、神の箱、主の愛。これらをイスラエルから継承し、接ぎ木されたユダが、今度はイスラエルを背負いゆくことになる。

この歴史的な変化は、政治的問題を乗り越えて生じる。つまりもともと北の部族を指していた神の民イスラエルにユダが加わり、次にこのユダが主流となって継続することで、イスラエルの概念が拡張されたと見るべきであろう。その主要な点は、律法を守る限り祝福の契約の中に守られる神の民であるということから、主に罪を赦されるほどに愛され、恵みを受ける主の民という、愛の要素がまさるようになっていく変化である。それは、その原点をダビデに置くことによって——主による選びと恵み、ダビデの罪の暴露、悔い改め、主による赦しといったダビデ物語を通して——可能になったのである。

4 ダビデの家の永遠性

1) 王国の滅び、ナタン預言

ダビデの子らによって継承された南ユダ王国は、北王国崩壊（前722年）後、バビロンによって滅ぼされる（エルサレム陥落：前587または586年）まで、130年余り存続した。

その間もユダ王国はアッシリア、バビロニア、エジプトといった近隣諸外国の圧迫を受け、宗教混淆を強要される時期もあり、ヤハウェ信仰はたえず脅かされていた。それゆえ、時の王の姿勢が重要であり、ダビデ以降の王たちは、特に主に対する信仰面においてつねにダビデと比較され、ダビデは王の基準となる⁷⁹⁾。アッシリアが衰退した紀元前7世紀の後半、大胆な宗教改革を行い、領土を大幅に拡大したヨシヤ王は申命記史家によって絶賛される（王下

22:2, 23:25) が、そのヨシヤ王も戦死してしまう (cf. 代下 35:22)。国の繁栄や存亡がその時々の王に委ねられている不安定な状況が続いた。そして南王国は破局を迎える。神殿は破壊され、捕囚を経験する。ダビデ王家の終焉と荒廃したエルサレムは、全イスラエルの存亡の危機を象徴した。

当時のユダの人々は、主の民イスラエルの将来のゆくえを、ダビデ王の子孫(最後の王ヨヤキンの運命)の継続に見ようとしたであろう⁸⁰⁾。すなわち、ヨヤキンは生きてダビデ王家の子孫を残せるのか。「あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえに続く。あなたの王座はとこしえに堅く据えられる」(サム下 7:16)とのダビデへの主の約束(ナタン預言)は、ヨヤキンの上にも実現するのかどうか。

このヨヤキンからユダの王座を継ぐ子孫は出ないというエレミヤ預言(エレ 22:24, 30)は覆されていない。歴代誌の系図にはヨヤキンの子孫が記されるが(代上 3:17 以下; マタ 1:12 以下)，ユダの王国(ダビデ王朝)は再建されることとはなかった。

しかし、王国の滅びは主の民イスラエルの滅びと同義ではない。

捕囚地においても主は契約の民イスラエルを顧みておられる。このビジョンを示されたのは、捕囚にされた宗教的指導者、知識階級、エリート層であったろう。彼らの中には神殿に仕える祭司・レビ人や王家に連なる者たちが多くいたはずだ。捕囚後、帰還した彼らを中心に、エルサレム神殿の再建工事とともに、ダビデが強く思い起こされたであろう。たしかにダビデは人間的な罪を犯したが、信仰において主と固く結ばれた王であった。主に愛され罪赦されたダビデの存在は、捕囚期という裁きの期間を経たイスラエルの民心に寄り添うものだったろう。ダビデは詩作や音楽に秀で戦術や人心を揺むことに長け、主に

79) Shimon Bar-Efrat, "From History to Story – The Development of the Figure of David in Biblical and Post-Biblical Literature," *For and Against David: Story and History in the Books of Samuel*, eds., A. Graeme Auld, Erik Eynikel, Uitgeverij Peeters, 2010, pp.47–56.

80) Brueggemann は、前 598 年にバビロンに連行されたユダの最後の王ヨヤキンの運命と荒廃した国土の将来に関する問題が、紀元前 6 世紀のイスラエル、特に申命記史家たちにとっての最大の課題であったろうと指摘する。Brueggemann, "Heir and Land", pp.84–8.

愛された人物としてサムエル記に描かれる。のちに理想的な人物として聖書諸文書に描かれ、さらにユダヤ教の伝統において理念となった⁸¹⁾。

こうして破滅の後に、ユダ族の頭であるダビデがイスラエルの星として輝くようになる。

ナタン預言（サム下7）は、ダビデの終生に関しての祝福であった可能性がある。しかし、これはのちに「永遠の契約」として拡張的に受け止め直され、無期限の約束として、あるいは現実と断絶された彼岸的希望として〈終末論的に〉解釈されるようになったのではないだろうか。ナタン預言を通して、主の家（神殿）とダビデの家の二つの家（**תְּמִימָה**）とが、分かちがたい共存関係に置かれたことが暗示されているのである。

主の臨在の象徴でありイスラエル12部族全体のアイデンティティーであつた「神の箱」の管理保護が、最終的にユダ族のダビデの家に委ねられたこともここに含まれるであろう。モーセ以来の主の契約の箱は、イスラエル（エフライム）からユダの家、ダビデの手へと移されたのである。それはイスラエルに対する主の永遠の契約の証と祭儀共同体の中心をダビデが得たことを意味する。

2) 主の約束とダビデの永遠

もちろん、神の箱も神殿も木で作られた容れ物にすぎない。有限であるゆえ永遠に存在することはできない。箱への言及はエレミヤ書3:16が最後で、実際バビロンによって神殿が破壊されたときに箱も焼失したようである。人々はそれを「求めもせず、改めて作ろうともしない」（エレ3:16）との預言通り、第二神殿時代には神の箱は存在しない。しかしそれはイスラエルが、亡国の歴史を経て、主の臨在の象徴物より中身である主の御言葉（律法）にこそ重要な永遠性があるということ、すなわち「神の言葉はとこしえに立つ」（イザ40:8）という真理に到達したことを示すであろう。

81) Bar-Efrat, op.cit., p.56.

歴史の寸断や政治的な絶望がある時こそ、時代の変化や人間の営為によらない自由な御意志によって民の生の只中に介入され、歴史を導かれる主が立たれるのである。国家崩壊の中で、主に愛された王ダビデが思い起こされ、「イスラエルの王座をとこしえに (מלוכה) 存続させる」(王上 9:5) との主の約束を根拠に、民族再興の希望を主に託すとともに、ダビデを理想の王、さらにイスラエル国家復興の象徴／理念とする気運が次第に生まれたのだろうと考えられる。

ダビデ／ユダの運命が亡国のイスラエルの将来と重ねられてゆく変動の中で、ダビデの子孫に対する祝福の永遠性を「保証」するのは、主の約束においてしかない。そこに目を向けるとき、神の民の永遠性は、地上の国家再建（人間の営為）の成否ではなく、民が主の教えを守り、真に主を礼拝することの中にあることを知るようになるのである。

それは国家という容れ物が壊れ、神殿祭儀が行えなくとも、主から与えられたトーラーと、それを守る民の命の継承がある限り、主の永遠なる御言葉は保たれうることを意味する。ダビデ／ユダの家が永遠に継続することで、絶えず新しいイスラエルが、主を常に礼拝する民として再生産されるゆえに、主のとこしえの契約は保証されるのである。

こうして、神を高く崇めたダビデは、永遠の主の約束と共に歩んだ王として、モーセと同じような立場に立つようになる。ここにおいて、神の法と王座の永遠性がダビデにおいて融合される。

主が顧みられるユダの家、ダビデ王家の正当性はこうして主張され、次第に確立していった。それはイスラエルに対するユダ、サマリヤ教団に対するエルサレムの聖所が、正統的イスラエル信仰の継承者であることを主張する必要があったからこそで、それはおそらく捕囚後のことである。そして、イスラエルの復興（建国・独立）はダビデの子孫から起こるという期待（メシア思想）が根を張るようになり、さらに新約聖書において、ダビデの子とみなされた主イエス・キリストへとつながるのである。

5 小結論

イスラエル 12 部族の中で中心的位置を占めるユダ族は、他の部族と異なり、その成立・発展ともダビデの台頭と深く関わる。ユダという名の個人・子孫の継続という一側面からこの部族をとりあげたとき、創世記の随所、特に創世記 38 章のユダ物語、またルツ記を経由してダビデの家の永続の希求につながる道筋を見ることができる。ユダの系譜の子孫の誕生についての叙述から、個人の行いの是非や、家の中の対立や危機を乗り越えて、主の選びの家系の継続を願われる、永遠なる主の慈しみがあることが浮き彫りにされる。

ダビデは、「神の箱」の移動に象徴されるモーセ由来のイスラエルの法の伝統をユダ（エルサレム）に据え、確立させたことを通して、王国崩壊後の民の希望の指標となっていました。これは、地上に「ダビデの子ら」を栄えさせることによって、永遠の主をとこしえに礼拝する民が存続することの願いの反映でもある。

第 7 章 捕囚後の「ユダとベニヤミン」⁸²⁾

この章では、イスラエルが王国の滅亡と民族の崩壊を経験した後の時代において、イスラエルの歴史が再編成される過程でイスラエル 12 部族がどのような形で再生されようとするのかを、旧約聖書の歴代誌の視点を通して考察した。歴代誌は特徴的にダビデを中心に据えており、ユダ族を最重要視するが、ベニヤミンに対しても特別な位置を与えていた点が注目される。

旧約聖書の特に捕囚後の文書においては、独立した王国の消滅以降もこの 12 部族を治めるのは主の主権であるという主張が鮮明になる。その過程において、歴代誌は、主の担い手であるレビ族（レビ人）を軸に、「ユダとベニヤミン」によって再統合される「全イスラエル」の理念的統一を掲げ、その主張のもとにイスラエルの歴史を再編集した。

82) 歴代誌におけるユダとベニヤミンについてのより詳しい論述は、拙論「歴代誌におけるベニヤミンの位置付け」（『伝道と神学』14 号、2021 年）45-62 頁を参照されたい。本稿は紙面の制約上、論文の第 7 章全体の要約の掲載にとどめた。

捕囚後の神殿や神の箱も失われた現実の中で、歴代誌は、ダビデ・ソロモンによって確立されたエルサレム神殿を中心とするユダヤ人共同体の理想的組織の継続を描くのである。冒頭に 12 部族の系図を記すこともその主張の表れである。同時にその系図も、部族ごとの扱いが多様であることから得られる情報も多い。系図において、歴代誌の書き手と思われるレビ人（レビ族）やダビデの部族ユダと並ぶベニヤミン部族への重視は特筆すべき点である。サウル王は排除するがベニヤミン族は無視しない歴代誌の視点は、この部族の歴史的かつ現実的な重要性を物語るものであろう。

また、エステル記は、離散の民のサバイバルの物語としてベニヤミンの子孫の活躍と繁栄を書き留めている⁸³⁾。エステル記が正典であることは、最終的にイスラエル 12 部族を代表するのは、ダビデ王由来の政治的筆頭のユダ族、および主の担い手であるモーセ以来のレビ人（レビ族）の傍に、もう一つの王的部族ベニヤミンが立っていることを主張するものである。ベニヤミン族はイスラエルの最初の王を出し、ヨセフの家の系譜に結びつきの強かった部族として、全イスラエルの一翼を担う存在であり続けたことを、我々は認めないわけにはいかない。

結び イスラエル 12 部族の陰影と栄光

本研究の主要な試みは、旧約聖書に刻まれている各部族の記憶や伝承の大小の痕跡をたぐり寄せて、イスラエル 12 部族に関する歴史的変遷と陰影の有りようを探求することであった。

大局的には一つの統合体のように見られうるイスラエル 12 部族であるが、その実態は非常に複雑で多様である。各部族間で濃淡があるが、旧約聖書には諸部族に関する比較的多くの素材（伝承、資料、物語の類）がある。それらに基づいて研究を進めたが、諸部族の歴史的な変遷の全貌を見極めるにはさらに深く広範囲な探求を要する。もとより重層的で複雑で全貌を掴みにくいのが旧

83) 第 7 章におけるエステル記についての論述は、本稿では省略した。拙論「エステル記における重層的構造」（『神学』75 号、2013 年）331-52 頁も参照されると幸いである。

約聖書であるが、本研究の中で、部分的・断片的ではあれ、新たに明らかになったこともあった。

総じて、イスラエル 12 部族内部での位置付けを考察すると、各論で取り上げたレビ、ヨセフ（マナセとエフライム）、ダン、ベニヤミン、ユダは、明らかに、ある時期あるいは全時代を通してイスラエルの重要な部族であった。そしてダビデ王国時代以降の「ユダ」との歴史的な関係においてユダ以外の諸部族の運命は決定づけられたと言える。

イスラエルを構成する 12 部族は、対外的には主の名のもとに結束する宗教的民族的共同体である。しかしその内部では、部族間の指導的地位をめぐる競争と変遷、反乱や戦争まで含む負の歴史を確かに経験した。その中にあって祭司的部族としてのレビ、王国時代の成立と繁栄に資したベニヤミンとユダの三つは、内部の対立と存亡の経験を経て、神殿崩壊・王国消滅後も中核的部族として存在し続けて、宗教的政治的責任を担った。それらの記憶や伝承を旧約聖書のテクストや物語の中に埋め込み、主の民イスラエルとしての尊厳を保持し、その歴史を過去から現在、そして将来へと書き綴った著者は、主であり、主の担い手であるレビ人であろう。最終的に（終末論的に？）12 部族からなる神の民イスラエルは、この主の支配の下で永遠に続くという主張がなされている。

旧約聖書におけるイスラエルは、もともとは定住の地を持たない遊牧民あるいは外国の寄留者であったが、主なる神の民となる契約の下で信仰共同体として発展し、実体を持つようになった民族的存在である。実際に土地に定着し、指導者や王を出し、宗教的基盤を形成し、政治的に国家を建設するといったこの民の歴史を体現したのは、紛れもなく「イスラエル 12 部族」の子らである。このことは旧約聖書全体が証言し、主張している基盤である。イスラエルは 12 部族によって形成され、保たれるという大義に基づいて、旧約聖書が編纂されたと言っても過言ではない。

その際に、イスラエルの名が退けられず、むしろ、永遠の主の民イスラエルは 12 部族からなるとの主張または神学的思想が掲げられた理由は、ユダ単独

ではない「ユダとベニヤミンおよびレビ人」を主体とするイスラエル 12 部族の子らがこれに関与していたからであろう。

(みやざき・かおる)